



木沢村総合学術調査について

徳島県立図書館長 今 崎 聰

阿波学会紀要第51号として木沢村総合学術調査の報告がまとまり、このたび発行の運びとなりました。総合学術調査は、徳島県立図書館と阿波学会の共催により、毎夏の恒例行事として実施されております。平成16年度は那賀郡木沢村において8月5日から10日間実施することとしておりましたが、7月31日に高知県に上陸した台風10号の記録的豪雨により、同村が甚大な被害を被ることとなり実施延期のやむ無きに至りました。このような大災害にもかかわらず村の熱意と住民の協力により、2ヶ月後の10月8日から10日間実施することが出来ました。

木沢村は、昭和30年4月、坂州村と沢谷村が合併して発足しました。総面積154.97 k m²、人口は平成17年2月で916人。地勢は、南北とも剣山山系に囲まれ平地は少なく、98%が山地で、剣山山麓に源を発する坂州木頭川が、村の中央を流れ集落が点在しています。近年は人口の急激な高齢化と若年層の減少が、地方自治体を取り巻く財政事情の悪化とともに大きな課題となっており、平成17年3月1日には、那賀郡5町村による合併により新たに「那賀町」として出発することとなっています。

村としても、歴史的な遺産・貴重な資料などを後世に引き継ぐため、村史の空白部分の編纂に着手しており、村並びに住民あけて調査に協力を頂くこととなりました。

今回の調査結果のうち、いくつか特徴的なものを紹介します。

調査時期が例年より2ヶ月遅れることとなったため、生物関連の調査が季節の影響を受けていると思われませんが、木沢村が本県の最奥部の山間に位置する「生物関連の宝庫」であることから、従来から多くの調査が行われており、各班とも関係資料を動員して分析を行っております。

地質班では、災害直後の斜面崩壊について崩壊場所ごとに地質等について詳しく分析し、崩壊の特徴について言及しています。

植生班及び植物相班は海拔500m程度以下、1,000m以下、1,000m以上の3層の垂直分布で分析を行っています。

史学班では、村内に多く伝わる平家伝説について、地名の由来も含めて聞き取りにより紹介しています。民俗班では、葬送の儀礼、祭礼、交流の要となっていた峠について紹介しています。

草食獣班は、村からの要望が強かった草食獣による食害被害の調査のため、徳島大学の協力により特に構成された班で、アンケートや樹木皮剥ぎ調査更に食痕調査及び糞の内容物調査を行い、その結果についての報告がなされたものです。秋から冬にかけての短期調査ということもあり十分ではないものの、今後の手がかりになる貴重なものと考えています。

そのほか多くの興味深い調査結果が報告されていますが、地域に密着したこのような調査・研究が地域の発展の一助となることは疑いのないところです。

終わりに、死者2名、全壊4棟、半壊7棟ほかという大きな災害の直後であったにもかかわらず、全面的にご協力をいただきました木沢村長さんや教育長さんをはじめ役場の方々、村民の方々、また、災害直後の交通の十分でない山間部を懸命に調査された調査員の皆様に厚くお礼申し上げます。